１９９７-Ⅱ乳用牛評価からの変更について

１．新３体型形質（外貌、肢蹄、前乳頭の長さ）の能力評価

これまでの乳用牛の体型評価においては、体型調査および牛群審査項目である得点４形質（決定得点および３部位）および線形 14 形質について評価を行ってまいりましたが、外貌、肢蹄は 1994 年４月から、また、前乳頭の長さは 1993 年４月からと審査開始時期が遅く、データ数も少なかった等の理由から評価されていませんでしたが、ある程度のデータが蓄積されたことから、1997-Ⅱより評価を実施することとしています。

なお、新３体型形質に採用する遺伝率及び誤差分散は、以下のとおりです。

	遺伝率	誤差分散
外貌	0.38	1.620
肢蹄	0.17	3.386
乳頭の長さ	0.52	

これらの遺伝率および誤差分散は、㈳日本ホルスタイン登録協会および帯広畜産大学鈴木助教授によって推定されたものです。

２．一部３回搾乳データの種雄牛評価への採用

３回搾乳記録については従来、種雄牛評価への採用を見送ってきたところですが、大規模経営体を中心に３回搾乳を行う農家が増加してきている現状にあわせ、条件を満たした一部の３回搾乳記録について、種雄牛評価に採用することになりました。

３回搾乳記録が種雄牛評価に採用されるためには、２回搾乳の記録に対する条件に加え、

・１乳期を通じた３回搾乳
・牛群・年次・産次内の記録はすべて３回搾乳（２回搾乳が混在した場合は２回搾乳記録のみ採用）
・搾乳日数 240 日以上の終了記録（拡張記録は採用しない）

といった条件を満たすことが必要です。３回搾乳の記録は既に雌牛評価で行っているように分娩時月齢・産次の効果を前補正した後、さらに 0.83 を乗じて評価に用いますが、上記のような条件を加えることで３回搾乳の効果が農家の効果としても補正され、種雄牛評価結果にはほとんど影響ないことが確認されました。

３．拡張係数の更新

1991～1995 年分娩の直近データを使って拡張係数を更新し、1997-Ⅱより採用しました。拡張係数の作成方法や考え方については、従来とかわりありません。